

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32682

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580057

研究課題名(和文) オーデンとマクニースのリブレットおよびラジオドラマのインターメディア的研究

研究課題名(英文) Comparative Study of W.H.Auden's librettos and MacNeice's radiodramas

研究代表者

辻 昌宏 (Tsuji, Masahiro)

明治大学・経営学部・専任教授

研究者番号：00188533

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：オーデンのリブレット及びラジオドラマとマクニースのラジオドラマを、可能なものは草稿も見て、完成した脚本のテキストと比較した。ラジオドラマの場合、放送テープのデジタル化したものを聴取して音楽の使用法を検討した。オーデンはストラヴィンスキーに英詩の韻律の特徴と音楽の付しかたを教えており、リブレットを書く際にもここはアリアでもレチタティーヴォでも構わないという柔軟性に富む指示をしている箇所が多数あった。マクニースはオーデンほど音楽に熱心ではないがDark Towerの成功における作曲家ブリテンの貢献を大きく評価しており、音楽以外の効果音にもこだわっていることが判った。

研究成果の概要(英文)：Comparing the draft and finished edition of W.H.Auden's libretto and radio drama and MacNeice's radio drama, I also listened to the digitalised version of radio dramas because I think the music and sound used in the radio dramas is an essential element of the play. I found out that Auden taught Stravinsky intensively the versification of English poems before he composed The Rakes Progress. Auden was flexible when he wrote librettos indicating a stanza can be an aria or recitativo. MacNeice is less enthusiastic about music but he greatly appreciated Britten's contribution to his Dark Tower's success. He was very careful about the sound effect of the radio dramas.

研究分野：英文学、リブレット

キーワード：ラジオドラマ リブレット オーデン マクニース ストラヴィンスキー

1. 研究開始当初の背景

(1) オペラ作品の研究は、作曲家に関するものと、上演の演奏批評や演出批評に偏っていたが、1990年代から徐々に、リブレットやリブレッティスタに注目されるようになってきた

(2) その背景には作曲家の書簡集や詳細な伝記の刊行により、作曲家とリブレッティスタ、劇場支配人、楽譜出版社の関係ややりとりが以前より詳細かつ具体的に分かるようになってきた

2. 研究の目的

(1) W.H. オーデンのオペラ・リブレット及びラジオドラマとルイ・マクニースのラジオドラマの台本を、文学、音楽、演劇の交差するインターメディア的な場として考察し、リブレット・台本作家が、作曲家や演出家からどういう要請を受けるのか、またその要請に対しどう反応し、リブレット・台本を作成していくかを調査する。

(2) リブレットやラジオドラマ台本を調査するにあたっての方法論的な問題点を明らかにする。アーカイブのアクセシビリティがどういう状況にあるかなどを調べる。

(3) リブレットやラジオドラマ台本が言語表現として、通常の演劇と比して、どんな特徴を有しているかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) W.H. オーデンとチェスター・コールマン共作のオペラ・リブレットの手書き原稿もしくは手書き原稿をマイクロフィルム化したものを閲覧し、完成稿と比較して、創作過程での試行錯誤や、作曲家とのコミュニケーションを跡付ける。

(2) マクニースのラジオ・ドラマや彼に関する音声資料を聴取し、どのような形で音楽が使用されているかを調査する。

(3) オーデンとストラヴィンスキーの間で交わされた書簡のみでなく、劇場関係者や知人、友人との間で交わされた書簡からオペラが成立するまでにどのような事態が生起し、それに対して、オーデン、ストラヴィンスキーはそれぞれどう反応していたかを調べる。

4. 研究成果

(1) オーデンとマクニースは同世代であり、旅行記を共作したりしているが、音楽への関わり方と言う点に関しては、オーデンの方がずっと積極的だったと言える。

オーデンはオペラのリブレットを書くだけでなく、作曲家ベンジャミン・ブリテンと組んでたくさんの歌曲を作曲している。ブリテンは古今の詩人の詩に曲を付しているが

その数においてオーデンは1、2を争うものとなっている。

こうした経験は、ストラヴィンスキーと組んでオペラ *The Rake's Progress* を作る際にも活かされている。オーデンは、英詩の韻律と、それに伏すべき音楽の関係について、ストラヴィンスキーに一週間にわたる一種の集中講義(といっても個人対象なのであるが)を行なっている。ロサンゼルスでストラヴィンスキーの家に泊まりこんでのレクチャーであり、オーデンが即興でさまざまな韻律の詩(の断片)を書き、それにすぐさまストラヴィンスキーが曲をつけて行くと言う実践的教育であった。

(2) 草稿の調査をすると、アーカイブによって複写に関する制限が全く異なることがわかって来た。例えば、NYパブリックライブラリーの特別コレクションの場合、1回に20枚までしか資料のデジタル写真を撮ることが許されていない。複写も許されず、閲覧したものに關してはメモを取るしかない。一方、ベンジャミン・ブリテンのアーカイブでは研究用であれば、自由に閲覧し、資料をデジタルカメラで撮影することが認められている。

ラジオドラマに関しては、ブリティッシュ・ライブラリーに多くの資料があるのだが、ブリティッシュライブラリーがテープを所蔵していてもそれを直接聴取できるわけではない。所蔵しているテープのデジタル化を事前に申し込み、そのデジタル化したものを管内でのみ聴取できるのだ。海外からもアクセス可能になっているものは極めて限定的である。

スイスのバーゼルにあるパウル・ザッヒャー研究所には世界一のストラヴィンスキーコレクションがあるが、閲覧方法は限定的で、全てマイクロフィルム化されたものを見る。しかも、カメラの持ち込み自体が禁止されており、一枚も写真が取れない。メモを取るだけである。

(3) こうした制限はあるのだが、パウル・ザッヒャー研究所で初めて得られた知見もある。オペラ *The Rake's Progress* の創作過程で、プロダクションを企画していた側は作曲がストラヴィンスキーでリブレットがオーデンによるものと考えており、途中まではその通り進行していたということだ。

オーデンはまずハリウッドのストラヴィンスキーの家に一週間泊まり、そこで前述のような英詩の韻律と音楽の関係を教え、かつリブレットの概要を作成したのである。

ところが途中からオーデンがストラヴィンスキーの許可も得ずにいつのまにかコールマンをリブレットの共作者として参加させた。そのため、ヴェネツィアのフェニーチェ劇場で初演される際に、作曲家とリブレッティストは招待されたのだが、劇場側は、そ

ここにコールマンを含めるべきかどうかで大いに困惑している旨が記された手紙があった(その手紙はストラヴィンスキーの書簡集には収められていない)。

またストラヴィンスキーはオーデン(及びコールマン)が書いたリブレットを顧問弁護士に一度ならず見せている。ストラヴィンスキーはこの顧問弁護士の審美眼を高く評価していたのである。

(4) マクニースの場合、楽器や歌手の声による音楽の使用にはオーデンほど熱心ではないが、詩における韻律、すなわち押韻やリズムの使用は、実に精緻で巧妙な仕掛けを施していることがわかった。長編詩 *Autumn Journal* では、マクニースは日々生起する政治的な事件と、彼の日常生活を共に描いているが、スペイン内戦末期のバルセローナを訪れた際には、市民への連帯を表現すべく、押韻のパターンをずらして行きその章が特別な章であることを押韻パターンで表現している。

また、二番目の夫人のヘドリへのインタビュー(これもブリティッシュ・ライブラリーに所蔵されていて、デジタル化を依頼し、館内でのみ聴取が許されたもの)によると、マクニースは詩を BBC の勤務から帰宅後に書いているのだが、声に出して韻律を確認していたという。

また、ラジオ・ドラマの傑作 *The Dark Tower* に関しては、音楽を担当したベンジャミン・ブリテンの貢献を高く評価している。

マクニースはラジオドラマにおける効果音にはこだわっていることが判った。マクニース自身が効果音の録音のために洞窟にロケに行っているほどだ。

(5) オーデンのラジオドラマ *Ascent of F6* では音楽を担当しているのが Benjamin Britten で、ピアノと打楽器による序曲が4分あり、Part 1 ではウクレレとピアノと歌が流れる部分がある。内容的にはシリアスな部分なので、ウクレレの異化効果は顕著である。Part 2 では男性合唱が入る部分や、別の箇所では電子音が4分に渡り用いられている。

(6) マクニースとオーデンのラジオドラマを通じて、ラジオドラマのメディアとしての特性は、オーデンも指摘している通り、場面や時間の転換が瞬時にできること、また登場人物一人一人のセリフが、リスナーにとってはあたかも独白のように響く。他の登場人物に向かって言われたセリフでもその人物が目に見えないので、リスナーに向かって言われている感じがするのである。そのためラジオ・ドラマは心理劇には適したメディアである。また、特定の日に、一斉に電波によってリスナーに届ける性質から時事的な話題や政治的プロパガンダを扱うことに向いてい

る。

(7) ラジオドラマでは、登場人物の姿がリスナーに見えないので、歴史上の人物を扱ったり、また全く架空の幻想的な登場人物を扱うことにも適している。どんな時代であっても舞台装置や衣装がいらないのでコスト面での制約が小さいからだ。実際、そういうタイプの作品をマクニースは書いていることがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

辻 昌宏、オペラにおける魔女、明治大学教養論集、査読無し、505 巻、2015、17-34

辻 昌宏、英文学およびイタリア文学におけるオペラ・リブレット、明治大学人文科学研究所紀要、査読有、77 巻、2015、99-134

〔学会発表〕(計 1 件)

辻 昌宏、日本イェイツ協会第 51 回、2015 年 11 月、西南大学、シンポジウム「イェイツと 1930 年代-オーデン・グループを参照枠として」において、発題者として「マクニースのイェイツ評価の揺らぎ」を発表

〔図書〕(計 2 件)

辻 昌宏 他、『アイルランド文学-その伝統と遺産』、開文社出版、2014、〔執筆章〕第 20 章「ルイ・マクニース-イデオロギー的中立と連帯のはざままで」、426-447。

辻 昌宏、2017、「リブレット」「ヴェデイ 1 人と作品」、「ドニゼッティ」「ロッシニ 1 人と作品」、オペラ/音楽劇研究所編『キーワードで読むオペラ/音楽劇研究ハンドブック』所収、あるテスバブリッシング

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻 昌宏 (TSUJI, Masahiro)
明治大学・経営学部・教授
研究者番号：00188533

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()